

新潟市方言におけるシラビーム方言的要素

Syllabemes in the Dialect of Niigata City

松 木 愛 美

MATSUKI Emi

Abstract

In this paper, an attempt will be made to examine the phonological classification of a Japanese dialect, and to search for the existence of the syllabeme phenomenon in the Niigata City dialect.

There are Japanese dialects which cannot analyze words such as "Chu-sha" and "Macchi" as two part units. In those dialects, long vowel(R), skipping-wise intonation(N), double consonant(Q) and the diphthong (ai, ui, and oi, etc.) are not taken as one unit of length. From this fact, Shibata (1962) assumed that there are dialects that have a different unit of the rhythm in a Japanese dialect, and classified it by the name of mora dialect/syllabeme dialect.

According to Shibata (1962), Tohoku, Hokuriku, Miyazaki, Kagoshima and Nantou are syllabeme dialect regions. Others are mora dialects. If all Japanese dialects are required to belong to one of the two categories, then an interesting question arises: Is the Niigata dialect a mora dialect or syllabeme dialect? Although no one ever mentioned the problem directly, the Niigata dialect has been indirectly suggested to be a syllabeme dialect in previous work.

In order to verify the existence and search for the features of the syllabeme in the Niigata dialect, Niigata City dialects were investigated. As a result, a certain syllabeme was confirmed. It is chiefly limited to the long vowel, and N, Q, and the diphthong appear as a mora. On the diphthong, it appears as syllabeme in shape of not causing the compensatory lengthening with the vowel unit.

Keywords : モーラ方言 シラビーム方言 特殊モーラ

0. はじめに¹

日本語方言に「チューシャ」、「マッチ」等の単語が二単位以上に細かく分析できない地域のあることが金田一春彦(1954)によって報告されている。それらの方言では、長音(R)・撥音(N)・促音(Q)・二重母音(ai, ui, oi等)が長さの上で一単位として認められない。柴田武(1962)は、この現象から日本語方言にリズムの単位が異なるものが存在するとし、モーラ方言／シラビーム方言という名称で分類した。

柴田(1962)によると、シラビーム方言は、東北地方からあるいは北陸にかけての地方と宮崎・鹿児島両県から南島にかけての地方に分布している。それ以外の地域はモーラ方言である。日本語の方言が必ずどちらかに属することを前提とするならば、新潟はモーラ方言であるのかシラビーム方言であるのか。シラビーム方言の特徴として具体的な現象を挙げているものは目にするものの、新潟方言がモーラ方言かシラビーム方言かという研究は筆者の調べた限りでは目にすることがない。先行研究によると、新潟方言にもシラビーム方言の特徴である特殊モーラの短呼現象が認められる。²

これら踏まえ本稿では、現在の新潟方言におけるシラビームの存在とその特徴を探ることを目的とする。

1. モーラ方言／シラビーム方言

日本語の諸方言を韻律単位から分類したモーラ方言／シラビーム方言という分類は、方言というものが音声として存在する意義に重きを置いて行われたものである。しかしながら、具体的な現象からそういった特徴を持ったまとまりとしてシラビーム方言という概念が出てくることはあっても、分類自体の吟味はあまり為されてこなかった。したがって、新潟市方言のシラビームについて触れる前に、当分類がどのようなものであるのか整理を試みる。

柴田(1962)の中に、岩手県花巻市出身の者が、ある時東京へ行って、道端で、「本屋はどこですか?」と尋ねても全く通じなかったという話がある。もう一度「ホンヤ」と言っても理解してもらえず、とうとう「ホ・ン・ヤ」と一音ずつ区切って発音したところ通じたという。東北地方と東京の「本屋」という単語の発音を比べてみると、「ン」が東京より東北地方が短くつまって「寸づまり」に聞こえる。このことから考えられるのは、東京と東北地方ではリズムの単位が異なるということである。東京では「ホ」「ン」「ヤ」がそれぞれリズムとして一単位であるのに対して、東北地方では「ホン」が一単位、「ヤ」が一単位だとすると、その違いによって前述のようなことも起こりうるのではないか。

以上のことから柴田(1962)では、日本語方言をリズムの単位によって二つに大別した。

モーラ方言とシラビーム方言の違いは、長音（R）や撥音（N）、促音（Q）、母音の第二要素（ai,au）等の特殊モーラと呼ばれるものが長さの上で自立性を示すことにある。モーラ方言では特殊モーラが長さの上で自立し、シラビーム方言ではそれが前のモーラに同化し、短く聞こえるのが特徴である。大橋純一（2008）では、これを客観的に示すため特殊音素の時間計測を行っている。その結果、音環境や語の性質等によって差は見られるものの、ある程度の傾向としてシラビーム（短呼）が観察されることを報告している。シラビーム方言の様々な特徴を論じる上で、まずこの特徴が前提としてある。

次に、拍意識についてである。この拍意識に関する調査は、実際の発音でシラビームの短呼が認められる場合、その現象の根拠をより強化する目的で行われる。柴田も指摘しているように、方言話者の自然な内省を得ることは難しい。客観的な資料を得られないこともこの調査の困難な点である。大橋純一（2009）では、方言話者に特殊音素を含んだ語を提示し、それがいくつに区切れるかという調査を行っている。そして、結果をパターン分類し、その中にシラビームを単位としていると認められるものがあることを報告している。たしかに、発音の実際と語の区切り認識がシラビームに一致すれば、シラビーム方言の根拠として強いものであると思われる。しかし、自然な内省を得ることの難しさや、方言の音声として存在する意義の強さを考慮して、この拍意識については補足的な条件としておく。

最後に、アクセント規則に関するものである。東北、九州等に分布する中で、シラビームがアクセント規則を担っているというのはどうやら九州に限定されるようだ。柴田（1962）にける宮崎県北諸県郡高城町方言では、すべての語の最後のシラブルが高くなる。これは、モーラではなく音節がアクセント規則を担う単位であることを示している。

(1) a. カベ（壁） ムスメ（娘） カウエタカ（乾いたか）

b. ココロン（心の） ヘイタイ（兵隊）

そして、窪藺（1999）の鹿児島方言では、シラビームを単位としてアクセントの型が二つに統一できる。（下線部にアクセント）

(2) A型：あめ（飴）、はな（鼻）、あか（赤）、かこ（過去）

かんこう（観光）、さど（佐渡）、サード、さどう（茶道）

ビル、ビール、アマゾン、ブラジル

B型：あめ（雨）、はな（花）、あお（青）、がっこう（学校）

ようかん（羊羹、洋館）、アメリカ

また、鹿児島方言では、丁寧な発音とぞんざいな発音との発音交替現象においても上記の二つのアクセント型が保たれる。

- (3) a. かごしま～かごいま、かごんま（鹿児島）
 b. くぼぞの～くぼぞん（窪菌＝人名）
 c. きょうだい～きよで（兄弟）
 d. たいがい～てげ（大概）

(3c)、(3d)に見られる融合においてもシラビーム方言的特徴が観察される。ある音が何らかの理由で消えたり、二つの音が一つの音に融合する際に起きる長母音化の現象を代償延長といい、たとえば「きょうだい」（兄弟）は「きょうでえ」、「おまえ」（お前）は「おめえ」というように、消えた分の長さを補う形で母音が延長される。しかし、この代償延長が鹿児島方言では必ずしも起こらない。

- (4) a. 大根（daikon）～ でこん（dekon）
 b. 大概（taigai）～ てげ（tege）
 c. 灰（hai）～ へ（he）
 d. 蠅（hae）～ へ（he）
 e. 違う（tigau）～ ちご（tigo）

鹿児島方言では語を数える単位として音節が採用されているため、母音融合が起きてモーラ数が減っても、結果的に音節の数が増えない限り代償延長は伴わない。母音融合が起こってもアクセント規則が変わらないということは音節を基調としているということの証拠になる。

ところで、これまでシラビーム方言の特徴を整理してきたが、それらの特徴がすべてのシラビーム方言に当てはまるわけではない。柴田（1962）には、東北方言は「はねる音」「つまる音」「のばす音」つまり撥音、促音、長音が「寸づまり」に聞こえ、九州の高城町方言はその三つにさらに二重母音に加わるとしている。二重母音の扱いについては、大橋純一（2008）において連母音融合音が融合途上の過渡期のような [ɛa] [ɛ:] として表れることや、個人によっては [ɛa] ～ [ɛa] のように連母音的ないしは二重母音的に発音されること、共通語話者並みかあるいはそれ以上に長呼されることが指摘されていることから、東北シラビーム方言では短呼の対象とはならないと考えられる。また、シラビームがアクセントの単位になるというのも九州のシラビーム方言に見られる特徴として指摘される。

このように、シラビーム方言と言ってもシラビームの特徴と分布地域に差が見られるこ

とがわかる。特殊モーラが短くつまって聞こえるというのは、シラビーム方言共通の特徴だろう。しかし、短呼される特殊モーラに二重母音を含めるか、シラビームがアクセントの単位となっているかはその方言による。

以上をまとめると、シラビーム方言の条件は以下の通りとなる。

1. 特殊モーラ（撥音、促音、長音、二重母音）が短呼される

※二重母音は必ずしも含まれない。場合によって、母音融合に伴う代償延長が起こらないという形で実現される。

2. 拍意識がシラビームを単位としている

3. シラビームがアクセントの単位となっている

これらすべてが当てはまることがシラビーム方言の必須条件ではないことは指摘しておかなければならない。いずれかの現象が観察された場合、他の条件について厳密な調査をすることが要される。

2 調査の概要

本章では、新潟市方言について行った調査の結果を示し、分析する。実際の方言音声において、シラビーム方言の特徴とされている現象がどのように実現するのかを探り、シラビーム方言／モーラ方言という観点から見た新潟方言の現状を明らかにしたい。

なお、当調査の対象地域は新潟市に限ったものであり、さらに被調査者の数も多くはない。それは、当調査が新潟にシラビーム方言的特徴がどの程度見られるか探るという目的のもと実施されたものであるためである。したがって、その結果は新潟全体の実状を示すものではない。

2.1 対象地点と調査方法

対象地点と話者は、新潟県新潟市東区山の下（23f・52f・62m）、東区東中野山（24f②）、江南区（旧横越村）（24f①・25f・52f）、秋葉区（旧新津市）（24f③）、西区内野（71f）である（数字は調査時点での年齢、mは男性、fは女性を表す）。52fは出身五泉、62mは佐渡で15年間→新潟5年間→東京16年間、52f①は出身五泉で4年間東京、71fは6歳まで東京に住んでいた。いずれも20年以上経過しており影響はないと思われる。それ以外の話者はいわゆる生え抜きである。

調査方法は、特殊モーラを含む単語を口頭で示し、それを繰り返して発音してもらうというものである。念のため、事前に「特に丁寧に言わずに、普段の言い方で」と添えた。

2.2 分析方法

聞き取り調査の分析は、特殊モーラの実現の仕方に着目する。持続時間を計測したものの客観資料として用いる。特殊モーラごとにその傾向を探る。また、柴田（1962）において「寸づまり」と称されることから、耳で聞いた印象もシラビームの判断資料として採用する。なお、音響分析は「音声録聞見 for Windows」によった。³

3 結果と分析

持続時間を計測したものをグラフに示したものを以下に掲載する。これは音節毎の長さの比率を示したものである。ある単語において自立モーラの長さで特殊モーラを含んだ音節の長さが等しくあるいは他のモーラよりも短くなれば、特殊モーラが短呼されていると判断される。

3.1 長音（/R/）

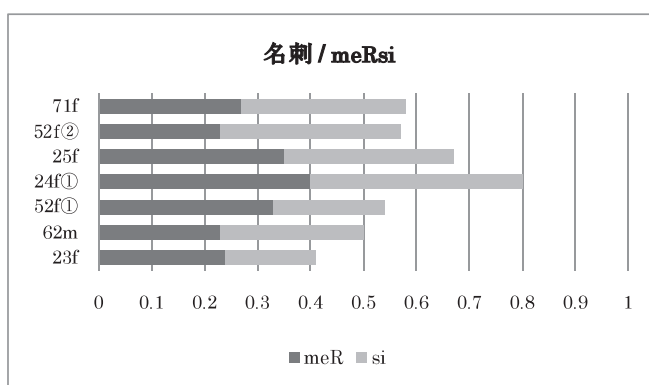


図 1

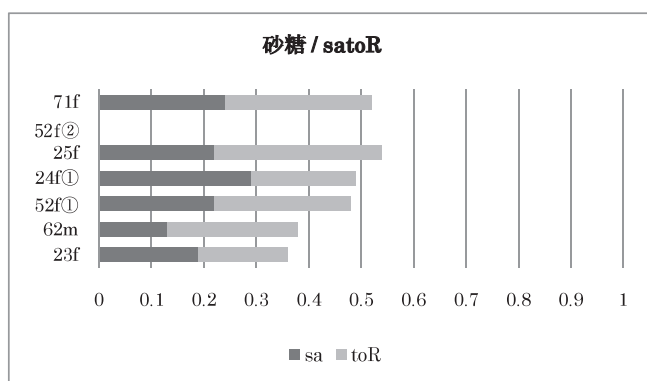


図 2

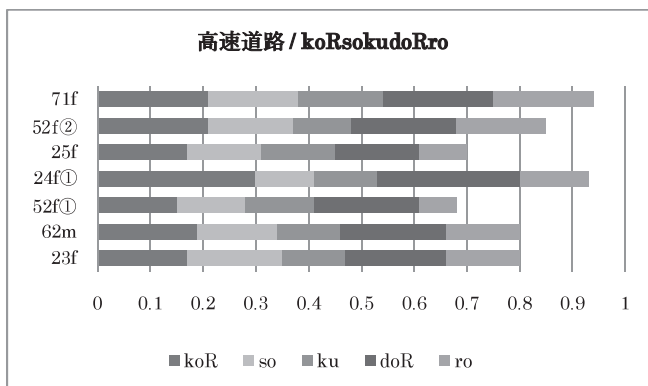


図3

図1「名刺(mersī)」は語中、図2「砂糖(sator)」は語末、図3の「高速道路(korsokudoRro)」は複数の特殊モーラを含むという音環境の違いがある。多少の個人差は見られるが、これら三つを通して、一定のシラビームと捉えられるものが見られる。

最も短呼の傾向が顕著だったのは「名刺」である。merとsiはほぼ同じ長さ、あるいはmerよりsiが長く発音されることがわかる。その差は平均して0.02で最も長いもので0.12であり、62m、71f、52f②に至ってはmerよりもsiが長い。この短呼は話者全体に共通して観察でき、したがって傾向と呼んでも差支えないだろう。

「砂糖」でも同様に短呼の傾向が認められる。差は平均して0.04であり、中にはsaがtorより長く発音される場合もある。「名刺」と同様の傾向が見られる。しかし、語末の特殊モーラ、特に長音/R/はいわゆる標準語にも見られる現象だとされている。これは調音エネルギーが語末に向かうにつれ弱まった結果起こるものであり、それゆえシラビーム方言以外でも見られるものだと考えられる（大橋純一 2008）。つまり、この短呼現象は生理的な理由によるものとも捉えられ、語によってはシラビームと判断しがたいものがある。

「高速道路」は長音を二つ含むことから、その前後の自立モーラとの関係に注目した。24f①においてkoRやdoRがsoやku、roのほぼ二倍の長さで発音されているものの、23fではすべての音節が0.12から0.19の間で発音されている。0.12はkuの長さであり、このkuは母音の無声化が起りやすいことからその長さは短くなることが多い。しかしながら、平均して0.07の差しかないことは、短呼と認められるだろう。全体を通して見ると、既述のkuの母音無声化や語のroの短さが目立つ。それを考慮したとしても、23fをはじめとし25f、52f①でも音節がほぼ同じ長さで発音されていることがわかる。また、全体を通して言えることは、個人においてkoRとdoRがほとんど変わらない長さで発音されることである。最も大きな差で0.05であることから、長音を複数含んだ語の場合はそれが長呼であれ短呼であれ、長さが等しくなる傾向にあると言えるだろう。

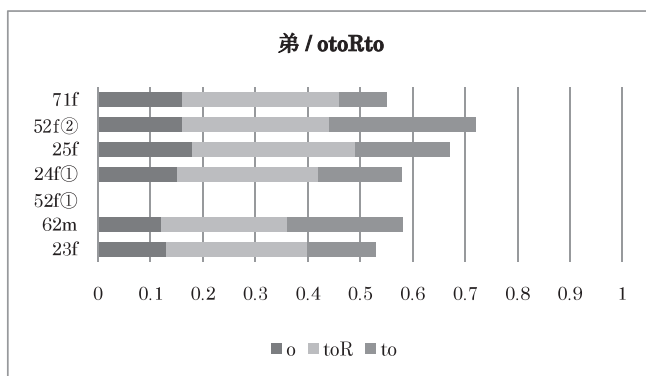


図 4

上記のような短呼が認められる一方で、図4の「弟 (otoRto)」では、全体として特殊モーラを含むtoRが自立モーラである o や to と比べ2倍程度の長さで発音されている。これは長音/R/の長さが短呼されずに保たれていることを意味する。図1から図3までは、個人の差は多少あれ、ある程度のシラビームの短呼が認められた。ところが、この「弟」では長音は短呼されるのが全体の傾向として認められる。つまり、長音/R/が短呼される現象は認められるが、すべてに当てはまるわけではなく語によってはモーラ的に実現する場合もあるということである。

3.2 撥音

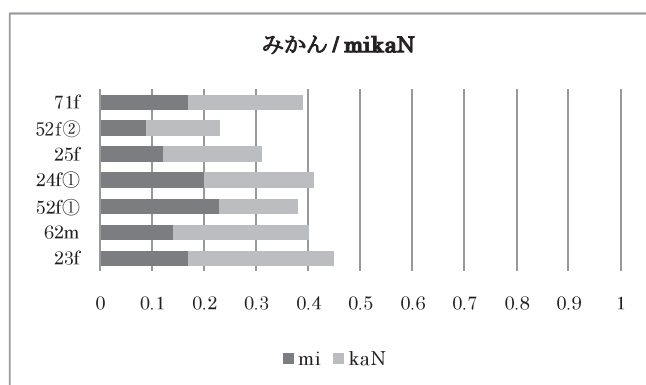


図 5

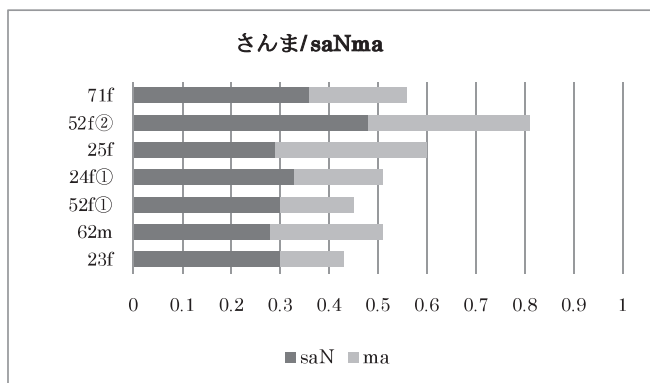


図 6

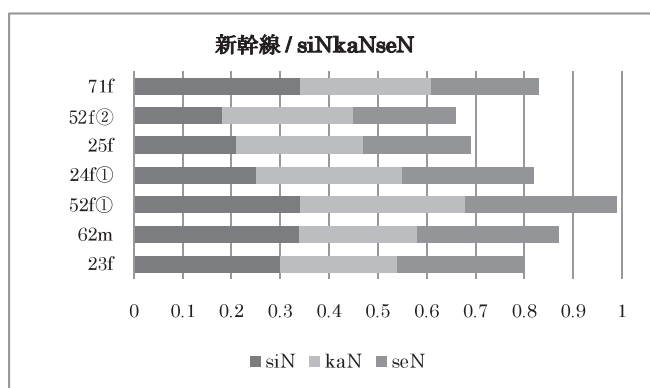


図 7

図5「みかん (mikan)」は、24f①と52fにおいて特に顕著な短呼が認められる。全体平均ではmiとkaNの差は0.05であり、これは短呼と言ってもよいだろう。しかし、語末という音環境の影響を考えるとこの短呼もシラビーム現象かどうかは疑わしい。同様に、撥音/N/が連続して三つ含まれる図7「新幹線 (sinkansen)」でも、siNとkaNに比べて語末のseNが短く発音される傾向にある。

図6「さんま (sanma)」は、25fがsaN=0.29、ma=0.31が最も顕著に短呼されていた。しかしながら、23fや52f①をはじめsanがmaの二倍近くの長さで発音されるものが多くを占めた。他の項目の聴覚判断においても、撥音/N/では長音/R/程のシラビームは確認できなかった。

3.3 促音

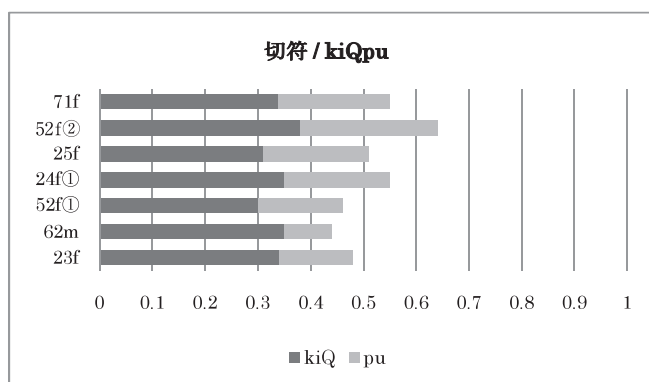


図 8

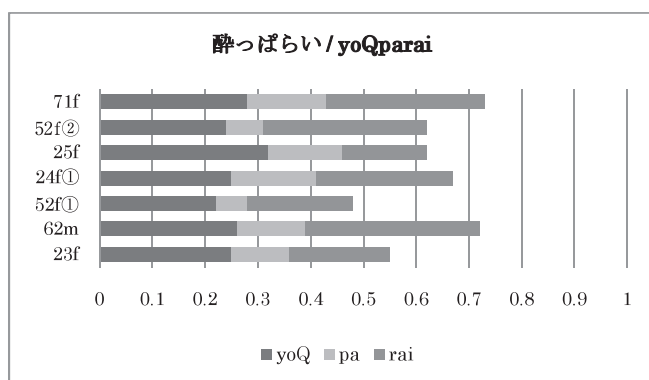


図 9

図8「切符 (kiqpu)」は、グラフを見てもわかる通り、短呼はほとんど認められない。短いものでも0.12の差がある。同様に図9「酔っ払い (yoqparai)」でも促音はモーラとしての長さを保っているように見える。むしろ、促音と二重母音にはさまれたpaがかなり短い印象を受ける。他の項目においても、促音は長さを保って発音されているようだった。短くなるどころか、他の自立モーラよりもしっかりとした長さを持って実現されているという印象を受けた。

以上のことから、促音/Q/は、語中・語末に関係なくシラビームの対象にはなりにくいということが言える。

3.4 二重母音

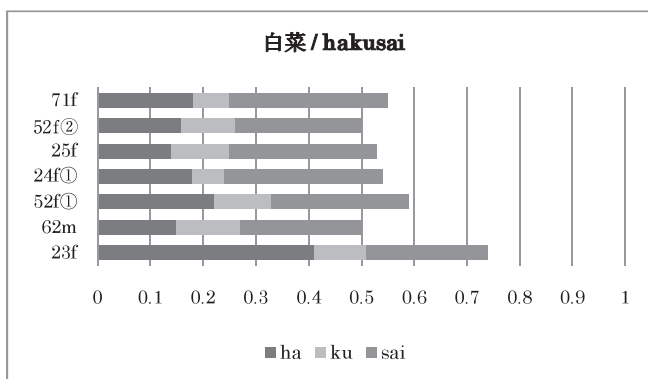


図10

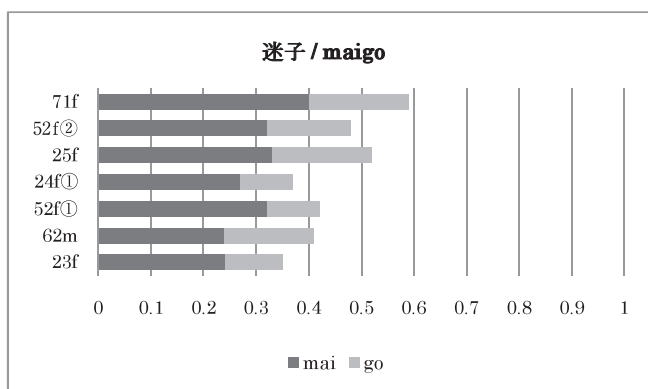


図11

図10「白菜 (haku sai)」、図11「迷子 (maigo)」は共に共通して目立った短呼は確認できない。むしろ、「白菜」において、kuの母音が無声化しやすいことや、実際持続時間がかなり短いことから、hakuとsaiがそれぞれリズムの一単位と認識されている可能性がある。これについては拍意識の調査結果で言及する。haとkuの持続時間を合計してもsaiの持続時間に至るものから超えてしまうものまで様々であり、一貫した傾向は認められなかった。

「迷子」は図を見てもわかる通り、maiはgoの二倍あるいはそれ以上の時間で発音されている。maiが長いというよりgoが極端に短く聞こえるという印象を受けた。よって、maiの長呼というより、goがそれ以上に短く実現される傾向が強くそれを補う形でmaiがしっかりとした長さを持って発音されているのかもしれない。しかし、図9「酔っぱらい (yoqparai)」の語末の二重母音raiを見ると、その前のpaの二倍近くの長さのことが多い。語末という環境にあってもその長さを保っているということは注目に値する。他の項目に

においても二重母音はある程度の長さを保って実現していた。「甘い (amai)」「辛い (karai)」「酸っぱい (suqpai)」「しょっぱい (sjoqpai)」「いっぱい (iqpai)」「赤い (akai)」「白い (siroi)」「黒い (kuroi)」「黄色い (kirroi)」「暗い (kurai)」「硬い (katai)」「高い (takai)」等でも、最後の i まではっきりと聞こえるものが多くを占めた。

以上より、当方言では二重母音はモーラの的に発音される傾向が強いと言える。

このように持続時間を計測した資料をもとに、特殊モーラそれぞれについてシラビームの傾向を探ったが、実際のところ調査で用いた語において聴覚判断で認められるようなシラビームはあまり確認できなかったのが事実である。持続時間を計測した結果では、ある程度のシラビームが確認できるとした長音でも、耳に残るような短呼ではない。時折、短呼と思われる音を耳にするも、語末という環境や話速自体の速さが関係していると思われるものが多かった。

しかしながら、調査の前後の会話において、わずかながらシラビーム的な発音が確認できた。特に、71f には耳に残る短呼がある程度認められた。当話者には、以前にも調査を行ったことがあり、その際にもシラビームの存在を確認した。たとえば、「アパート (アパート)」「ビンボ (貧乏)」「キューリョ (給料)」「フドサン (不動産)」等が挙げられる。これら本来あるべき長音はほとんど聞こえないに等しい。長さというより長音個所がぼっかり空洞になったような無音の時間があるように感じた。強いて言うなら強弱の問題である。また、「婿」と「向こう」がほぼ同じような発音で実現されていた。ここでもやはり長音が短呼される傾向が強いことがわかる。

以上のことをまとめると、新潟方言に確認されるシラビームは長音が最も多く、促音・撥音・二重母音は語や個人によって差はあるが、長音のそれよりは頻度は少ないということになる。

ところで、持続時間の計測も、突き詰めて考えれば分析する側の主観が全く反映されていないとは言えない。サウンドスペクトログラムによって視覚的に示された音声も、耳で聞くのみよりは手掛かりが多いとはいえ、音と音の境界を決定するには、少なからず主観が影響されていると言えるだろう。よって、このような資料にのみ頼るのではなく、耳で聞いた印象等と合わせて参照することが重要だと考える。

4 二重母音の融合

3.4 において、二重母音は ai というそのままの形での短呼について述べた。ここでは連続する母音が融合（あるいは同化）した結果、代償延長が起らない現象について述べる。

1 で整理したシラビーム方言で、鹿児島方言には連続する母音が融合し、その結果代償延長が生じず、それがアクセントにも現れていることに触れたが、このような現象は当調

査においても認められた。たとえば、「お前さん」という語が「オメーサン」とはならず「オメ」あるいは「オメサン」となる。多くの話者が「オメーサン」と伸ばさないと明言していることから、当方言において一般性のある事実であると考えられる。他にも、「いっぱい」は「イッペ」、「しょっぱい」は「ショッペ」等、二重母音は母音融合に伴う代償延長が起こらない例は多く見られる。

また、「高い」が「ターケ」、「暑い」が「アッチェ」となる母音融合と特殊モーラが本来あるべき場所ではない個所に挿入される現象があることは三章でも見た。これはきわめて規則性の強い現象であるが、シラビーム現象とするには語の長さが保たれるという点を考慮すると認めがたいのではと考え、本章において検討することとする。

当調査では、項目ごとの発音と拍意識の調査に加え、上記のような現象がどのような環境で起こるのか詳しく見るために、二重母音がどのように変化するのかも合わせて調査を行った。質問としては、「高い」が「ターケ」になるとしたら、次の語はどうなるかという聞き方をした。その結果を以下に示す。

- (5) a. きいろい → キーレ
 めんどくさい → メンドクッセ
 からい → カーレ
 うすい → ウーセ・ウッセ
 きたない → キッタネ
 あおい → アーオイ
 ちかい → チーケ
 でかい → デッケ
 きみわるい → キミワーリ・キミワレー
 むしあつい → ムシアッチェ
- b. ちいさい → チーセ・チツチェ
 とおい → トーケ (ネ)
 みじかい → ミジケ
 うるさい → ウルセ
 しつこい → シツケ
 しかたない → シカタネ
 さりげない → サリゲネ
 もうしわけない → モーシワケネ
 くすぐったい → クスグッテ
 おちつかない → オチツカネ

きなくさい → キナクセ
 はしたない → ハシタネ
 みっともない → ミットモネ
 いたしかたない → イタシカタネ
 ころもとない → ココロモトネ

(5a)は「ターケ」に類する例である。比較的短く、かつ日常的に使うような語が多い。また、長音だけでなく促音が挿入される例もある。長音・促音が挿入される位置は後ろから二番目あるいは三番目のモーラである。

しかしすべての二重母音がこのように変化するわけではない。(5b)では、(5a)のように長音や促音が挿入されない。aiがeになるだけである。aiという本来2モーラの長さを持つものがeという1モーラの長さになり、そこで失った長さが補われないということは、当方言におけるリズムにシラビームが全く存在しないわけではないことを示す。また、(33b)の「チーセ・チッセ」「トーケ」は一見「ターケ」と同じような変化を見せているように感じられるが、元々長音を含んでいるため、結果的にその位置に変化はない。これらの例は、鹿児島方言の例からも、シラビーム現象だと判断してもよいと思われる。

(5b)は日常的にあまり使わないような語が多い。語彙として確立されているもの以外でもこれほど規則性のある変化、しかもシラビーム現象的な変化を見せるということは、「高い」が「ターケ」「赤い」が「アーケ」になるような現象もやはり広義のシラビーム現象だと言えるのではないか。というのも、「ターケ」「アーケ」等の語は規則性が高いというより、もはや語彙として確立されているとも考えられるのである。純粋なシラビームではないが、広く見てシラビームと認めてもよいように思われる。

また、当方言で「冷たい」を「ハッコイ」あるいは「ヒャッコイ」と言い、これを「ハッケ」と言う場合もあるという。

(6) つめたい → ハッコイ (ヒャッコイ) → ハッケ

「ハッコイ」と「ハッケ」両方が用いられるということは、二重母音すべてが融合し短呼されるわけではないことを示すものであるが、同時に二重母音とそれが融合したものが共存していることも表している。これをモーラ方言／シラビーム方言という観点から見ると、新潟方言がモーラ方言かシラビーム方言かまでは言えないが、当方言にはモーラとシラビームの両方が存在しているということが窺える。もっとも、長音が短く発音されることはシラビーム方言に限った現象ではない。

5 まとめ

新潟方言におけるシラビーム現象の存在を探るべく調査を行い、分析・考察を加えてきた。特殊モーラの実現の仕方を分析する際には、聴覚判断によるものに加え、特殊モーラを含む音節の持続時間を計測した。さらに、拍意識についても調査を行った。その結果、一定のシラビーム現象が認められることがわかった。

シラビーム現象と言っても、特殊モーラがすべて短呼されるわけではない。短呼がもっとも顕著に確認されるのは長音であった。撥音・促音・二重母音については、むしろモーラの的に実現する傾向にある。

長音についても、すべての音が短呼されるのではなかった。それは個人の中でも一貫しないものであり、語による傾向が強いことが窺える。一話者の中で、ある語の長音は短呼されるのに、他の語の長音は短呼されないというのは特殊モーラ全体として言えることである。音環境や他の音との組み合わせによる影響だとも考えられるが、聴覚判断でもわずかではあるがシラビームと認められるであろう発音が確認できたことから、それらはシラビームと判断することとする。

また、二重母音はそのままの形では短呼されず、母音融合に伴う代償延長が生じないという形でシラビームとして実現される。「高い」が「ターケ」となるような例も、この意味で広義のシラビーム現象と認められる。

今回の調査結果から判断する限り、新潟市方言においてリズムの単位として機能しているのはモーラであると言えるだろう。しかしながら、そんな中でもシラビームの存在を確認することができた。それが方言におけるリズムの単位となっているかまでは至らなかったものの、長母音の短呼傾向や二重母音の融合に伴う代償延長が起こらないことを確認し、それを新潟方言のシラビーム現象としたことはモーラ方言／シラビーム方言という分類の概念として新たな観点を提起できたのではないかと思う。

注

- 1 本稿は平成22年度に新潟大学大学院現代社会文化研究科に提出した修士論文から一部を抜粋し、加筆・修正を加えたものである。
- 2 「短呼」とは、概念としては元々長い音節が短く発音されることを指す。この論文で定義したものによるとシラビームと同義であるが、以後「短呼」という名称を使用する。なお、「長呼」と対照的に用いられた場合は、単に母音が長いか短いかという意味である。
- 3 「音声録聞見 for Windows」とは、簡易音響分析ソフトである。聴覚に加え、音声を視覚的に表示す

ることが可能となる。今回の音節境界を判断する際には、サウンドスペクトログラム上での継続時間時間および周波数を基準として分析した。

参考文献

- 大橋勝男（2000）『新潟方言の記述的研究 第1巻会話・音声編』高志書院
- 大橋勝男（2008）『日本海沿岸方言音声の研究』おうふう
- 大橋純一（2008）「東北シラビーム方言における特殊音素の実現の実際」『いわき明星大学人文学部研究紀要』第21号 pp.28～40
- 大橋純一（2009）「音連続の区切りの認識と実際音との相関」『いわき明星大学人文学部研究紀要』第22号 pp.27～40
- 大橋純一（2005）『日本のことばシリーズ15 新潟県のことば』（Ⅰ総論、Ⅱ県内各地の方言）平山輝男他編、明治書院
- 金田一春彦（1954）「音韻」、東条操編『日本方言学』吉川弘文館
- 窪蘭晴夫・太田聡（1998:a）『日英語比較選書10 音韻構造とアクセント』研究社
- 窪蘭晴夫（1998:b）『日英語対象による英語学演習シリーズ1 音声学・音韻論』くろしお出版
- 窪蘭晴夫（1998:c）『岩波講座 言語の科学2 音声』岩波書店
- 窪蘭晴夫（1999）『現代言語学入門2 日本語の音声』岩波書店
- 窪蘭晴夫・本間猛（2002）『英語学モノグラフシリーズ15 音節とモーラ』研究社
- 剣持隼一郎（1996）『新潟県の方言』野島出版
- 柴田武（1962）「音韻」、国語学会編『方言学概説』武蔵野書院
- 城生佰太郎（1977）「現代日本語の音韻」、橋本萬太郎他『岩波講座 日本語 5音韻』岩波書店